

ロベール・ギスカールあるいは不在の君主 — クライストの民衆観と遅延された革命 —

西尾 宇 広

1. はじめに——挫折の意味づけから

しかし少なくとも、この僕が、これ以上一つの作品に力を傾注しようものなら、それこそばかげた愚行ということになるでしょう。こうなったからには認めざるをえませんが、この作品は僕には荷が重すぎる。まだ存在していない誰かのために僕は身を退き (Ich trete vor Einem zurück, der noch nicht da ist)、千年まえもって、その人の才気に敬服します。¹

それはおそらく、作家ハインリヒ・フォン・クライストにとっての最初で最大の挫折の経験であった。姉ウルリーケに宛てた 1803 年 10 月 5 日付のこの手紙のなかで、彼はある「作品」の完成の断念を表明し、同月 26 日には、それを「燃やして破棄した」旨を同じく姉に報告している。² 彼が 1802 年から構想に取り組み始めた悲劇『ノルマン人の王ロベール・ギスカール』(以下『ギスカール』と略記)³ は、当時その一部を朗読で聞いたクリストフ・マルティン・ヴィーラントから絶賛されたことで有名だが、⁴ この文学界の大家からの激励にクライストは応えるこ

¹ Kleist, Heinrich von: Briefe. In: *Sämtliche Werke und Briefe*. Bd. 2. Auf der Grundlage der Brandenburger Ausgabe. Hrsg. v. Roland Reuß und Peter Staengle. München 2010, S. 817. 強調はクライスト本人。以下、この全集版への参照に際しては略号「SWB」を用い、巻数を付記する。

² Vgl. ebd., S. 818f.

³ テキストは以下のものを使用し、引用と参照箇所は本文中の括弧内に行数のみを記す。Kleist, Heinrich von: Fragment aus dem Trauerspiel: Robert Guiskard, Herzog der Normänner. In: SWB I, S. 141-162. なお、ヴィーラントの言葉が正しいとすれば、構想当初のタイトルは「ノルマン人ギスカールの死 (Tod Guiscards des Normanns)」であった。Vgl. Sembdner, Helmut (Hrsg.): *Heinrich von Kleists Lebensspuren. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen*. München 1996, S. 82.

⁴ Vgl. ebd., S. 79-82. マインツの友人ゲオルク・ヴェーデキントに宛てた手紙 (1804 年 4 月 10 日付) のなかで、ヴィーラントはクライストとの交遊を回顧しながら、「アイスキュロス、ソフォクレス、シェイクスピアの才気が協同して一篇の悲劇を書き上げたとしたら、クライストの『ノルマン人ギスカールの死』のようなものができることだろう」と述べ、構想段階でのこの悲劇を高く評価してみせた。もっとも、これははずで

とができなかった。のちに彼はふたたびこの戯曲の執筆に着手し、みずからが主宰する芸術雑誌『フェーブス (Phöbus)』の 1808 年 4・5 月合併号に作品の断章を発表するところまでこぎつける。しかしそれ以後この悲劇が完成の日を迎えることはついになく、現在われわれのもとに残されているのは、その 1807 年から 1808 年にかけて執筆された断片としてのテキストのみである。⁵

作品の舞台は 11 世紀後半、アプリア・カラブリア公として南イタリアを支配していた実在のノルマン人王ロベール・ギスカル (1015-1085) の東ローマ帝国遠征である。首都コンスタンティノープルの陥落を目前に、ギスカルの軍隊はペストの猛威にさらされる。そして、強き王として、みずからのペストへの耐性を信じて疑わず、感染者たちの慰問にあたったギスカルにもついに感染の疑いが向けられる、というところで、このわずか 10 場で構成された悲劇の断章は幕を閉じる。

この未完の悲劇にまつわる「挫折」の意味づけが、従来の作品解釈においては一つの焦点となってきた。そのアプローチの方向は大きく二つに分かれている。一つは、作中におけるギスカルの遠征の挫折、作者クライストの執筆の挫折、それにさらに彼の人生そのものの挫折——戯曲の破棄を告げる手紙のなかで、彼は名誉の夢を断たれた絶望から死への願望を吐露し、そのうち実際にそれを試みている⁶——を重ねあわせて、いわば伝記的な観点からこの悲劇の「挫折」の必然性を読み解く立場、もう一つは、純粋に詩学的な観点からの——たとえば、その挫折する描写それ自体のなかに、描きえないものの描写を志向した作者の意図を読み込むといったような——読解である。⁷ こうした解釈実践が建設的なものであるかどうかは別として、かりにその延長線上に本稿を定位するならば、本稿は、この「挫折」に歴史的な観点から一つの理由を求める試みであるといえるだろう。ここでめざされるのは、1808 年の断片『ギスカル』が立っていた歴史的な位置の測定である。

作品が構想された当初と、のちにその断章が雑誌に掲載された時点とでは、クライストを取り

にクライストが作品の執筆を諦めたあとで書かれた所見だが、彼がまだ作品の完成に腐心していた時期にも、ヴィーラントはそれを励ます内容の手紙を彼に向けて書き送っており、手紙を受けとった数日後には、クライストはそのことを誇らしげに姉に報告している (1803 年 7 月 3 日付)。Vgl. SWB II, S. 815-817.

⁵ 以下でなされる考察は、必然的に、この雑誌掲載版のテキストとそれに前後する時期の政治・社会状況をおもな対象としている。

⁶ Vgl. ebd., S. 818f. クライストはフランス北部のサントメールでナポレオンのイギリス遠征部隊に参加し、軍人として死ぬことを企図していたが、二度にわたる従軍申請が却下されたため、この計画は実現しなかった。Vgl. Müller-Salget, Klaus: *Heinrich von Kleist*. Stuttgart 2002, S. 73f.

⁷ こうした方向性の研究については、レクラム版のあとがきで簡潔にまとめられている。Vgl. Kleist, Heinrich von: *Robert Guiskard, Herzog der Normänner*. Studienausgabe. Hrsg. v. Carlos Spoerhase. Stuttgart 2011, S. 86-92. („Nachwort“) なお、このレクラム版の編者自身は『ギスカル』の断片性を、未来に向けた「未履行の約束」を暗示するものとして解釈しているが、この指摘は本稿の趣旨にとっても示唆的である。

巻く状況の変化には著しいものがあった。とりわけ 1806 年に起きた一連の政治的イベント——ライン同盟の成立 (7 月 12 日)、皇帝フランツ二世の退位による神聖ローマ帝国の解体 (8 月 6 日)、イエーナ・アウエルシュテットの戦いにおけるプロイセン軍の大敗 (10 月 14 日) ——は、彼がその後、みずからの政治的立場 (愛国主義への傾斜とプロイセン改革への共感) をあらたに選びとっていくうえで、大きな分水嶺となる経験であったといえるだろう。⁸ 旧来の封建的身分制秩序が機能不全に陥り、それに代わるあたらしい社会の枠組みが模索されねばならないことは、疑う余地のない現実となり始めていた。⁹

こうした文脈は、のちに成立した断片『ギスカル』を読み解く際にもけっして無視できるものではない。そしてここに、従来の研究が示してきた関心のもう一つの焦点がある。歴史的な視座に立つて、作中に現れる君主と民衆の対立構図を主題化するこの系列の研究では、ギスカールのカリスマ性あるいは民衆にあたえられた政治的決定権の大きさに着目し、そこに統治の正統性をめぐる作者の問題意識を読みとることがめざされてきた。一方では、旧体制 (またはナポレオンの独裁体制) に対するクライストの批判、¹⁰ 他方では、市民の政治参加への道をひらきつつ君

⁸ こうした政治状況の変化と並んで見逃してはならないのは、それ以前には「パンのために書く」ことへの軽蔑をあらわにしていたクライストが、この年になってはじめて職業作家への意思を公言するようになるという事実である。その背景には、官職のキャリアからの完全なリタイアによって収入の道を断たれたという事情があった。友人のオットー・アウグスト・リュール・フォン・リーリエンシュテルンに宛てて書かれた 1806 年 8 月 31 日付の手紙を参照。Vgl. SWB II, S. 855. あわせて以下も参照のこと。Vgl. Thorwart, Wolfgang: *Heinrich von Kleists Kritik der gesellschaftlichen Ordnungsprinzipien. Zu H. v. Kleists Leben und Werk unter besonderer Berücksichtigung der theologisch-rationalistischen Jugendschriften*. Würzburg 2004, S. 190-196. こうしたクライストの姿勢の変化に鑑みると、かりに 1802/03 年における『ギスカル』の断念が単純に美的な判断にもとづくものであったとしても、1807/08 年の挫折も同じ理由によるものだったとは考えがたい。

⁹ この時期の政治状況に関する包括的な記述としては、Press, Volker: *Das Ende des alten Reiches und die deutsche Nation*. In: *Kleist-Jahrbuch* (1993), S. 31-55.

¹⁰ Vgl. Fink, Gonthier-Louis: *Das Motiv der Rebellion in Kleists Werk im Spannungsfeld der Französischen Revolution und der Napoleonischen Kriege*. In: *Kleist-Jahrbuch* (1988/89), S. 64-88, bes. S. 71ff.; Schmidt, Jochen: *Heinrich von Kleist. Die Dramen und Erzählungen in ihrer Epoche*. Darmstadt 2003, S. 128-136. ギスカールの独裁者の側面に作者のナポレオン批判を読み込んだ例は多い。とりわけ指摘されるのは、1799 年のエジプト遠征の際にペストに見舞われたナポレオン軍の状況と、『ギスカル』で描かれた状況との類似である。Vgl. Kleist (2011), S. 66. („Zugänge“) ——こうした参照関係は、しかし、この作品の読解をさらに困難なものにする。1805 年末に友人リーリエンシュテルンに宛てて書かれた手紙のなかで、クライストはナポレオンを「世界の悪霊」と弾劾し、それがもたらす「ものごとのあらたな秩序」が「古い秩序の転覆」でしかぬいことを嘆いているが (SWB II, S. 846)、この「古い秩序」を代表する人物こそ、まさに君主ギスカルその人なのであって、いわば旧秩序の破壊者と体現者という相反する二つの人格が、この一人の君主像に投影されていることになるからである。ただし、いわば君主制の功罪を一身に引き受ける人物として構想された、このギスカールの両義性それ自身が、理想的君主の表象にとって根本的な障害となったということは十分に考えられる。

主制を温存する、プロイセン改革的な理想の統治モデルへの作者の志向が強調されるなど、¹¹ その評価は多岐にわたる。このような見通しは、一面において、たしかに作品のもつ重要な歴史的意義を救い出すものではあるだろう。ただし、その固定化された静的な視角からは、テキストのなかで配されている価値評価の揺らぎの様態をとらえきれず、また、そこではテキストが社会的現実のたんなる反映物へと還元されてしまう嫌いがある。¹²

実態はそれほど単純なものではない。あとで詳しくみるように、テキストのなかにはフランス革命への暗喩に始まり、民衆の直接行動の脅威を中和するための「代表者」の存在や、正統な君主の資格（法的に保障された正統性か、民衆による支持か）をめぐる支配者層内部での立場対立が描き込まれ、さらに、戯曲冒頭でみられる民衆の不穏な態度とは裏腹に、最終的には彼らの熱狂的な支持を集めていることがあきらかとなる君主ギスカールは、ペストに冒され死に瀕している。この錯綜した価値観の断片群は、現実の社会状況に対するユートピア的な代案と解釈できるような、調和的な像を結ぶものではけっしてない。¹³ ここに描かれた政治的欲望のモザイク画は、たしかに一つの変革の瞬間を物語るものではあるだろう。ただしそれは、旧体制への批判とはほど遠い君主の決死の延命措置と、彼を失うことに対する民衆の戸惑いによって果てしなく遅延されている、いわば完成することのない革命なのだ。¹⁴

この未完のテキストが示唆しているのは、それが成立した歴史的時点においては、その現実に

¹¹ Vgl. Demeleer, Iris: Legitimation und Charisma. Zu *Robert Guiskard*. In: Hinderer, Walter (Hrsg.): *Kleists Dramen. Neue Interpretationen*. Stuttgart 1981, S. 73-92. デネラーは、テキストに単純な旧体制批判を読み込むのではなく、ギスカールに対する民衆の支持という基本的ながら重要な点を的確に指摘している。ただしそこに、民衆からのカリスマ的な支持に支えられた君主による理想的統治への展望を読みとろうとするその態度は、あまりに楽観的だろう。彼女の分析では、ギスカールが瀕死の状態であり、さらにこの戯曲が断片に終わったという二つの基本的事実のもつ重要性が、十分に考慮されていない。なお、君主の「正統性」と「カリスマ性」というこのデネラーの主題設定を引き継いだ最近の論考としては、たとえば以下を参照。Vgl. Riedl, Peter Philipp: *Texturen des Terrors: Politische Gewalt im Werk Heinrich von Kleists*. In: *Publications of the English Goethe Society* 78 (2009) H. 1-2, S. 32-46, bes. S. 35-38.

¹² こうした解釈の一面性に対する批判としては、Stephens, Anthony: Art. „Robert Guiskard, Herzog der Normänner“. In: Breuer, Ingo (Hrsg.): *Kleist-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. Stuttgart 2009, S. 62-67, hier S. 65f.

¹³ 註 11 参照。

¹⁴ この点に関連して、すでにシュトレラーは、この戯曲断片のなかで「民衆の成熟性」に対するクライストの不信が表れていることを指摘している。『ギスカール』に作者の否定的な民衆評価を読み込んでいる点で、本稿とも問題意識を共有する主張であり、またこの指摘が、ルソーの『社会契約論』(1762)との対比から導かれている点も興味深い。Vgl. Streller, Siegfried: *Das dramatische Werk Heinrich von Kleists*. Berlin 1966, S. 49-56. ただしシュトレラーの誤解では、ルソーの民衆観との差異化に力点が置かれすぎているために、当時の「民衆 (Volk)」がはらんでいた両義性そのものをクライストのテキストに読み込む可能性がはじめから排除されてしまっている。本論第 2 章以降でみていくように、そうした「民衆」の両義性はクライストにとってもけっして無縁な問題ではありえなかった。なお、『ギスカール』が未完に終わった点について、シュトレラーは、その原因を戯曲自体の純粋な形式的なレベルの問題性こそ求めている。

おける参照項が不在であるがゆえに想像することすら困難であり、結果として断片のままにとどまらざるをえなかった、作者クライストのある解決の試み、彼が混沌とする現実の価値状況からの脱出をはかり失敗した、一つの挫折の痕跡である。¹⁵ 以下では、とりわけ支配者層と民衆との関係に照準をあわせつつ、その双方に対して作品内部でなされている価値づけの布置を仔細に検証することで、テキストが解決をめざしながらもついにしえなかった、政治的・社会的な問題の所在をあきらかにしたい。ただし、この検証作業を歴史的な文脈のなかでおこなううえでは、まず、作品内部の世界と外部の現実とをつなぎとめるための基盤となる価値観を確認しておく必要がある。作中で重要な役割を担い、実際ここでの分析の対象でもある「民衆 (Volk)」という存在、その言葉とそれによって表象される人々が、当時の社会でもっていた意味と価値の内実を目を向けることから、一連の考察を始めよう。

2. 1800年頃の民衆の輪郭

民衆とは誰か？——とりわけ1800年を前後する時期において、この問いに正確に答えることは難しい。啓蒙主義者たちによって推進されたコスモポリタニズムの世紀が終わりを迎え、ナショナリズムの世紀へと移行する世紀転換期に、¹⁶ 「民衆」あるいは「民族」と訳されるこのドイツ語の言葉は、多様な意味の充填と価値の不安定な変動とを経験した。歴史家ラインホルト・コゼレックの言葉を借りれば、「ドイツ語の〈民衆／民族 (Volk)〉は1800年頃にはじめて一つの根本概念へと昇級したのである」。¹⁷ もとより本稿の目的は、この長大な概念史の書きかえにあるわけではない。ここでは一つの作業仮説として『ギスカル』の置かれた歴史的な文脈にある程度の見通しをあたえるために、1800年頃の「民衆／民族」をめぐる状況の変遷のなかからいくつかの重要な局面を確認しておくことにしたい。

当時ドイツ語圏で出版されていたアーデルングの4巻本の『高地ドイツ語辞典』(1793-1801)をひもとくと、「Volk」の記事は大きく二つの項目にわかれている。すなわち、「1. [...] 多数の、また若干数の生物の集団」¹⁸ と、「2. 数名の人からなる一つのまとまり、ただし狭義にお

¹⁵ 文学作品における言語実践を、現実存在する社会矛盾の象徴的解決の試みととらえる立場については、フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識 社会的象徴行為としての物語』(大橋洋一／木村茂雄／太田耕人 訳) 平凡社 2010年を参照。

¹⁶ Vgl. Prignitz, Christoph: Art. „Kosmopolitismus“. In: Reinalter, Helmut (Hrsg.): *Lexikon zu Demokratie und Liberalismus, 1750-1848/49*. Frankfurt am Main 1993, S. 191-194.

¹⁷ Koselleck, Reinhart / Gschnitzer, Fritz / Werner, Karl Ferdinand / Schönemann, Bernd: Art. „Volk, Nation, Nationalismus, Masse“. In: *Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*. Bd. 7. Hrsg. v. Otto Brunner, Werner Conze, Reinhart Koselleck. Stuttgart 1992, S. 141-431, hier S. 149.

¹⁸ Adelung, Johann Christoph: *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart, mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen*. 4 Bde. 2. verm.

いては、共通の祖先をもち共通の言語によって結びついた大勢の人々」¹⁹ であり、後者はおおよそ「民族」という訳語で理解されるものに対応している。前者にはさらに数段階の低位分類がなされているが、とりわけ興味深いのは、「人間の集団」としての「Volk」にあたえられた五つの低位区分²⁰のうち、その最後の項目の説明である。²¹

国民(Nation)²² あるいは以下の第二の意味〔上述の「2」を指す〕における Volk の下層の構成員(Die untern Classen der Glieder)であり、手工業で生計を立てている人々のこと。これも、卑俗な生活世界でのみ(nur im gemeinen Leben)、また、拭い去りがたい軽蔑的なニュアンスをともなって(mit einem anklebenden verächtlichen [sic] Nebenverstande)使われてきた用法である。〔…〕国家において、首長を除くすべての人のことを Volk とするのは、広義の理解である。なぜならより厳格な意味においては、これは身分の卑しい人々について(von mehrern geringen Personen)用いられることの多い言葉だからだ。〔…〕国民あるいは市民社会の最大部分でありながら最底辺にある人々、という意味に関して、この言葉の品位をふたたび高める(adeln)試みが、最近の一部の作家たちによっておこなわれている。このような試みが広く賛同を集めることが望ましい。国家の最大部分でありながら、不当にももっとも軽蔑されている人々を表すための高貴で穏当な言葉が、存在していないからである。²³〔引用者註〕

ひとまずここでのアーデルングの定義をもとに、「民衆」としての「Volk」の輪郭をとらえておこう。それは、「国民」を形成する「下層」の人々を表す集合名詞であり、「最近の一部の作家たち」の尽力にもかかわらず、「拭い去りがたい軽蔑的なニュアンス」をともなって用いられる呼

und verb. Ausg. Leipzig 1793-1801. Mit einer Einführung und Bibliographie von Helmut Henne. 2. Nachdr. Hildesheim/Zürich/New York 1990, Bd. 4, Art. „Das Volk“, Sp. 1224-1226, hier Sp. 1224.

¹⁹ Ebd., Sp. 1225.

²⁰ ほかの四つの区分は、順に、「家族」「奉公人」「兵士・軍隊」「あらゆる類の人間集団」となっている。最後に挙げた意味での使用例であっても、場合によっては、「身分の卑しい」人々に対する「軽蔑的な」ニュアンスを帯びることがあったという。Vgl. ebd., Sp. 1224f.

²¹ 「Volk」の訳語に関して、テキストの性質上訳出が困難であるため、以下の訳文では原語のまま残した。ただし格変化は反映させず、すべて1格のかたちで統一した。

²² この文脈では、ほかに「民族」という訳語も考えられるが、「Volk」との差異化を重視し「国民」と訳した。以下、本論では一律にこの訳語を採用している。また、「Nation」の訳語の問題（「国民」か「国家」か）については、ジョージ・L・モッセ『大衆の国民化 ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』（佐藤卓己/佐藤八寿子 訳）柏書房 1994年、235頁以下の佐藤卓己による「訳者解説」も参照のこと。

²³ Adelung, Sp. 1225.

称である。「Volk」という言葉につきまとうこの侮蔑の響きは根強いもので、アーデルングの推測によれば、当時、まさにその否定的な響きが要因となって、上述の第二の意味、すなわち生まれや言語を同じくする人々の集団を表す場合には、「民族 (Volk)」ではなく「国民 (Nation)」や「種族 (Völkerschaft)」という言葉を用いることのほうが慣例化していたほどであったという。²⁴

しかし、かつては自明のごとく蔑みの念を喚起するものであったこの「民衆」という言葉が、このとき大きな価値の引き上げの局面を迎えつつあったこともたしかだろう。アーデルングがここで「最近の一部の作家たち」に寄せている期待の大きさが、そのことを間接的に裏づけている。それは、この言葉があらたに獲得しつつあった「民族」という含意、あるいは、ドイツ語圏ではそれと同義に用いられていた「国民 (Nation)」というフランス語由来の外来語に触発された一つの変化であった。その要諦は次のようにまとめることができるだろう。すなわち、それまで「国家」の成員のなかの一部の人々（「最大部分でありながら最底辺にある人々」）を指す限定的な概念であった「民衆」は、「生まれ」や「言語」の共通性によって担保される「民族」、そしてそこに属するすべての人々を意味する包摂的な概念へと格上げされたのである。

こうした「Volk」概念格上げの流れを決定づけたのは、1789年の大革命であったといえる。たしかに、もともと特定の社会階層に対する名辞にすぎなかった一つの言葉を政治的概念にまで引き上げる、というこの企て自体は、ドイツ語圏ではたとえばヘルダーの手によって、すでに革命以前から着手されていたものではあった。しかし、革命期のフランスでなされた「民衆 (people)」概念および「国民 (nation)」概念の再編と構築、それにつづくナポレオン時代の経験が、ドイツ語圏の知識階層に一つのモデルと教訓をあたえ、²⁵ 同じく「民衆」を「民族/国民」

²⁴ Vgl. ebd., Sp. 1225f. なお、アーデルングより数年のちに出版されたカンペの 5 巻本の『ドイツ語辞典』(1807-1811)においても、「Volk」の項目に関する記述はおおむねアーデルングの説明をなぞったものとなっている。Vgl. Campe, Joachim Heinrich: *Wörterbuch der Deutschen Sprache*. 5 Bde, Braunschweig 1807-1811. Hrsg. v. Helmut Henne. Hildesheim / New York 1969f., Bd. 5, Art. „Das Volk“, S. 433.

²⁵ Vgl. Schönemann, Bernd: „Volk“ und „Nation“ in Deutschland und Frankreich 1760-1815. Zur politischen Karriere zweier Begriffe. In: Herrmann, Ulrich / Oelkers, Jürgen (Hrsg.): *Französische Revolution und Pädagogik der Moderne. Aufklärung, Revolution und Menschenbildung im Übergang vom Ancien Régime zur bürgerlichen Gesellschaft*. Weinheim 1989, S. 275-292; François, Etienne: „People“ als politische Kategorie. In: Herrmann, Ulrich (Hrsg.): *Volk – Nation – Vaterland*. Hamburg 1996, S. 35-45. 革命以前にはその意味内容自体が不明確で、かつそれが用いられる際にはほぼ否定的な含意をともなっていた「民衆 (people)」という言葉は、1789 年以降めまぐるしい価値の変動にさらされた。革命当初、あらたに主権者となった「第三身分」の人々を表す名称としては、それ以前からすでに積極的な意味で用いられていた「国民 (nation)」という言葉が採用されたが、革命が急進期に入ると、とりわけマラーとロベスピエールという二人の革命家の言論を介して、「民衆」概念は次第に政治化されていく。その結果、現実の市民からは完全に遊離し、純粹に理念的な審級を意味する用語へと極度に抽象化されたこの言葉は、ジャコバン派の独裁体制を正当化するための鍵語として不動の地位を確立するにいたるが、そうした

へと変成していくプロジェクトの契機になったことは強調しておいていいだろう。ナポレオン戦争期もなれば、ゼロ年代の後半になると、民族アイデンティティの構成要素としての「言語」の重要性が高まり、それともなって外来語の「国民 (Nation)」ではなく「民族 (Volk)」に積極的な価値を認めようという気運も高まったが、結局のちの終戦にいたるまで、この二つの言葉はどちらがすがたを消すこともなく相補的な共存関係をつづけることとなったのである。²⁶

3. 『ギスカール』を見る視角——『オーストリア救国について』

1800 年をまたいで起こったこの一連の価値変動は、しかし、容易に予想されるように、けっして円滑に推移したわけではない。以前には侮蔑の対象ですらあった、この「民衆」と呼ばれる社会の圧倒的多数者を、それが「民族」であれ「国民」であれ、何らかの高次の集合概念へと昇格・包摂していく試みは、当然のことながら大きな不協和音を生まずにはいかなかったし、その軋みはレトリックによって解消/隠蔽されねばならないものだった。クライストもその例外ではない。おそらく、当時の愛国主義活動家たちのサークルに関わる過程でこの「民衆」の問題に直面することとなった彼は、テキストにおける言語実践を通してその解決を模索していたように思われる。²⁷ 本稿は『ギスカール』をこうした試みの一例ととらえその解説をめざすものであるが、その考察へと向かうまえに、ここでさらに一本の補助線を引いておきたい。1809 年に成立したとみられるクライストの手になる政治評論『オーストリア救国について』を一つの定点とし、そこから『ギスカール』を逆照射することで、この未完の悲劇がもつ独特の意義がより明瞭に示されるはずだ。

「巨大かつ包括的なあらゆる危機は、それが適切に対処された場合には、国家に対して、その瞬間、民主的な様相 (ein demokratisches Ansehen) をあたえるものである」という印象的な一

「民衆」賛美の流れもロバスピエールの失脚を境に退潮し、以後ふたたび「国民」という語がそれにとって代わることとなった。

²⁶ 18 世紀後半からウィーン会議にかんがての「Volk」概念および「Nation」概念の変遷一般については、Koselleck / Gschnitzer / Werner / Schönemann, S. 307-347 を参照。また、Hagemann, Karen: „Männlicher Muth und Deutsche Ehre“: Nation, Militär und Geschlecht zur Zeit der Antinapoleonischen Kriege Preußens. Paderborn 2002, S. 224-236 は、この点について簡潔ながら有益な見通しをあたえてくれる。なお、この時期の「Volk」概念全般にあてはまることとして、「民衆」の政治参加の問題となる場合には、そこから「女性」と「賤民 (Pöbel)」が排除されていたことを指摘しておきたい。とくに「賤民」については、無産であることが必ずしもその条件とはみなされておらず、その意味で、実質的には社会的なカテゴリーですらなかったが、このつねに否定的に表象される他者を「民衆/民族」から排斥する言説は、当時数多く生み出されていた。Vgl. Riethmüller, Jürgen: *Die Anfänge der Demokratie in Deutschland*. Erfurt 2002, S. 34-41.

²⁷ クライストのこの模索の一端を、戯曲『ヘルマンの戦い』(1808 年完成) において展開されている友情のレトリックのなかに読み込んだ例として、拙論「友人たちのデモクラシー——クライスト『ヘルマンの戦い』における友情の論理」：京都大学大学院独文研究室『研究報告』第 25 号 (2011 年)、1-29 頁所収を参照。

文で始まるこのテキストは、ヴァグラムの戦い（1809年7月5/6日）におけるオーストリア軍の敗戦ののち、その敗軍の将であるオーストリア皇帝フランツ一世に向けて、対ナポレオン戦争における具体的な政策を進言する体裁で書かれた政治評論である。²⁸「民主的」という言葉がそのもっともラディカルな意味において暗示しているように、²⁹ここで披歴されているのは国民の総動員にもとづく徹底抗戦の戦略であり、そこには「民衆」を「国民」に架橋するためにクライストが採ったレトリックの一端が露呈している。

鍵となるのは、君主の存在と民衆の位置づけだ。——「民主的な様相」（つまり、民衆／国民の総動員）を許容した結果、事態が「警察の手に負えなくなる」（民衆が暴徒化する）のではないかという恐れから、いつその「災害」（ナポレオンによる支配）を甘受しようという考えが皇帝の脳裏をよぎることがあるかもしれぬ、そう考えるクライストは、テキストの冒頭ですでに

²⁸ Kleist, Heinrich von: Über die Rettung der österreichischen Staaten / Über die Rettung von Österreich. In: *Sämtliche Werke und Briefe in vier Bänden*. Bd. 3: Sämtliche Erzählungen, Anekdoten, Gedichte, Schriften. Hrsg. v. Klaus Müller-Salget. Frankfurt am Main 1990, S. 496-503, hier S. 497. このテキストの校訂の経緯は複雑だが、引用した全集版には「初稿」と「最終稿」の二つの稿が掲載されている。（初稿の表題は「オーストリア諸国家の救出について」である。）初稿にくらべて、最終稿は全体的に切り詰めて論理的な整理がなされ、かつ政治的には主張を和らげた内容となっている。引用はこの最終稿からおこなった。なお、テキストの校訂に関しては、同じ全集版の編者による以下の論考を参照のこと。Vgl. Müller-Salget, Klaus: Heinrich von Kleist: 'Über die Rettung von Österreich'. Eine Wiederentdeckung. In: *Kleist-Jahrbuch* (1994), S. 3-48, bes. S. 3-8. 全集よりもあとになって発表されたこの論考のなかで、彼はみずから担当した全集版の註釈について、それを補足・修正する内容の見解を述べている。

²⁹ うえに引用した一節については、初稿では、「民主的な様相」を構成する具体的な人々（「若者と老人」「富豪と貧民」「高貴な者と卑しい者」）が列挙されている。Vgl. Kleist (1990), S. 496. なお、「民主的」という言葉は、クライストのすべてのテキストのなかでここにしか現れない。Vgl. Schanze, Helmut: *Wörterbuch zu Heinrich von Kleist. Sämtliche Erzählungen, Anekdoten und kleine Schriften*. 2., völlig neu bearb. Aufl. Tübingen 1989, S. 87. この言葉を主題にクライストを論じたものは少ないが、たとえば以下を参照。Vgl. Földényi, László F.: Art. „DEMOKRATISCH“. In: Ders.: *Heinrich von Kleist. Im Netz der Wörter*: Aus dem Ungarischen übers. von Akos Doma. München 1999, S. 91-98; 大宮勘一郎「クライスト「群れ」の民主政」：宇野邦一／堀千晶／芳川泰久 編『ドゥルーズ 千の文学』せりか書房 2011年、118~127頁所収。——ここで、1800年頃における「民主主義 (Demokratie)」概念について簡単に補足しておきたい。現在では一般に「民主主義」と訳される「Demokratie」という言葉の当時の用法のなかには、純粹な政治体制の一分類を示す伝統的な意味、すなわち「民主制」という意味がまだ根強く残っていた。それは、ギリシアの都市国家とくらべ人口が飛躍的に増大した当時のヨーロッパ諸国家においては、実質的には実現不可能な政治体制を意味していたが、その一方で、民衆こそが主権をもつべきであるとする「人民主権 (Volkssouveränität)」の考え方は、ルソー以降着実に浸透していく。この世紀転換期において、「Demokratie」という言葉は、厳密な意味での国家形態を意味する用語（「民主制」）から、めざされるべき一つの理念、歴史哲学的な目標（「民主主義」）へと、その内実を変質させていくこととなった。Vgl. Conze, Werner / Meier, Christian / Koselleck, Reinhart / Maier, Hans / Reimann, Hans Leo: Art. „Demokratie“. In: *Geschichtliche Grundbegriffe*. Bd. 1. Stuttgart 1972, S. 821-899, bes. S. 847-861; 森政稔「民主主義を論じる文法について」：『現代思想 特集＝民主主義という問題』11月号、第23巻第12号（1995年）、154-179頁所収、164頁以下参照。

そうした皇帝の機先を制して次のように言う。「そのような考えは狂気の沙汰であろうし、それが専制君主の心に浮かぶことはありえても、誠実で道徳的な君主にかぎってはありえない」³⁰と。しかし、当局の統制をまめがれた民衆蜂起の潜勢力に対する大きな期待が窺われる、テキスト冒頭のこの過激な主張の内蘊は、それからまもなくあきらかとなる。全8節から構成される最終稿の提言のうち、その第6節を引用しよう。

この原則〔何があろうと対ナポレオン戦争を完遂するという原則〕が確立され次第、国民 (Nation) が、政府の措置をそのような……無私で支持する善意に満たされているかどうかということは、もはやまったく問題にはならなくなる。むしろ政府はその前提として、民衆 (Volk) に対してしかるべき要求をおこない、その力を考えられうるかぎりの仕方です断的に活用し、政府の指示が民衆によって達せられるよう、政府の精神に対して払われるべき当然の敬意を獲得しなければならない。³¹ [引用者註]

ここで示された方針は、「民主的な様相」を要求する冒頭の主張に真っ向から対立している。たしかに直前の第5節では、この戦争が「帝権の存続のために」戦われるものではないことが明記されており、³² その意味で、一見無制限に認められている（「考えられうるかぎりの仕方です」）かこみえるここでの政府の「専断的」な「措置」は、（少なくとも理屈のうえでは）一定の制約を課されたものとなっている。しかし、はじめに当局の「手に負えなくなる」ほど期待されていた民衆の力は、政府によって統御可能な領域へとあきらかに押し込まれ、そこでは実質的に、「帝権」が「存在」しつづけることが確約されている点を見逃してはならないだろう。さらに、ここでの「国民」と「民衆」という言葉の使いわけは——その差異がテキストにとって重大な意味をもつものではないにもかかわらず、しかしまさにそれゆえに——、さきに確認しておいた18世紀以来の二つの言葉のあいだの葛藤が、1809年の時点においてもなお残存していたことを示す間接的な証左となっている。国家を構成する圧倒的多数者の存在は、政府に対するその自発的な態度（「善意」の「支持」）が問題となるかぎりにおいて「国民」と呼ばれ、反対に、政府からの「要求」を唯々諾々と呑むだけの受動的な客体としてそれがイメージされるとき、その集団には「民衆」という名称があたえられるのである。ただし、そうした「民衆」の受動性の裏側に

³⁰ Kleist (1990), S. 497.

³¹ Ebd., S. 501.

³² Ebd., S. 499.

は、その暴力的な反転に対する為政者たちの恐怖が刻印されていることを忘れてはならない。³³ここに、クライストが見出した解決を読み解くための一つの糸口がある。

テキストは、「ドイツ人の再興者にしてその暫定的君主 (provisorischer Regent)」³⁴とされるオーストリア皇帝フランツ一世の仮定の布告によって締めくくられている。「暫定的」という形容詞によって、一般意志にもとづく法治状態への移行を託されたこの君主は、³⁵さらにテキストの冒頭においては、「誠実で道徳的な君主」と想定される存在であった。この理想的な君主像、民衆からの「当然の敬意」によって支えられた〈善き君主〉こそが、「民衆」と「国民」のあいだのジレンマをめぐるクライストが紡ごうとしたレトリックにおいて、そのかまめとなっている装置なのだ。民衆の国民化のプロジェクトは、民衆の総動員によって現出する「民主的な様相」において達成される。そして同時に、この君主の存在がその状態のはらむ暴力的な契機を厳正に統御することで、このレトリックはその初見の印象とは裏腹に、旧体制とその崩壊後の世界とのあいだにきわめて穏当な着地点を見出したのである。³⁶

こうした論法がたんなる矛盾と紙一重のきわどい線のうえに成り立つものであったことは、このテキストにくり返し施された加筆・修正における意図の両義性が、それをよく物語っている。そこにはたしかにクライスト自身の迷いと揺れが表出しているが、³⁷それにしても、一人の君主

³³ 「民衆」に関して、さらに初稿のテキストにおいては、全面戦争の結果、「二千年前に森から現れ出たときのような裸のすがたで民衆 (Völk) が生まれ出てくる」という記述がみられ、ここでの「民衆」にある種の原始的なイメージが付与されていることがわかる。Vgl. ebd., S. 500. ただし、ここで想定されている自然状態（における民衆）が、肯定的なものなのか否定的なものなのかはそれほど判然としていない。むしろクライストにおいては、自然な存在としての「民衆」に対する憧憬と恐怖が、連続的なもの、表裏のものとして理解されていたように思われる。ルソー的な自然状態が群衆の暴力的な蜂起に反転するという事態は、たとえば『チリの地震』(1807/10) のなかでその典型的な描出を確認することができる。Vgl. Gamper, Michael: *Masse lesen, Masse schreiben. Eine Diskurs- und Imaginationsgeschichte der Menschenmenge 1765-1930*. München 2007, S. 195-211.

³⁴ Kleist (1990), S. 501.

³⁵ 『ミヒヤエル・コールハース』(1810) においても「われらが暫定的世界政府 (unsere[] provisorische[] Weltregierung)」という表現で同じ形容詞が用いられている。Vgl. Kleist, Heinrich von: Michael Kohlhaas. In: Ebd., S. 11-142, hier S. 73. この言葉の意味について、ハーマッハーはカントの『人倫の形而上学』(1797) における説明との関連を示唆している。Vgl. Hamacher, Bernd: Heinrich von Kleist, *Michael Kohlhaas. Erläuterungen und Dokumente*. Stuttgart 2003, S. 31f.

³⁶ これと同種の「解決」を、クライストの同時代人フリードリヒ・シュレーゲルはすでにこの約十年前に実践していた。カントの『永遠平和のために』(1795) への応答として書かれたシュレーゲルの論文 (1796) を手がかりに、通常「転向」として理解されている彼の民主主義者から君主制支持者への政治思想上の変遷を、「共和主義」思想の一貫した展開として読み解いた、田中均『ドイツ・ロマン主義美学——フリードリヒ・シュレーゲルにおける芸術と共同体』御茶の水書房 2010年、49-70頁を参照。

³⁷ Vgl. Müller-Salget (1994), S. 40f. 民衆蜂起に対するクライストの両義的な評価についても、ミュラー＝ザルゲットは正確な指摘をおこなっている。本稿ではこれを「国民」と「民衆」のあいだの葛藤の発露として位置づけた。

が存在するための余地をテキストのなかに実際に確保し、実在の皇帝をテキストの仮想の宛て名に指名することができた当時の作者は、その約二年前に彼が抱えていたジレンマからは、すでに一応の脱出を遂げていたといえるだろう。——彼の晩年に執拗につきまとうことになったこの「民衆」の影は、その断片『ギスカル』において、はたしてどのようなすがたをとって表れているのだろうか。そしてまた、「君主」の影は？

4. 『ギスカル』の歴史的位置——君主の余命

1797年、ザクセンの軍人であり歴史家でもあったカール・ヴィルヘルム・フェルディナント・フォン・フンク (1761-1828) によって書き下ろされた評伝『アプリア・カラブリア公ロベール・ギスカル』が、シラーの主筆する雑誌『ホーレン』に発表された。クライストが『ギスカル』の構想にあたって取材していた可能性が指摘されているテキストである。³⁸ 実際には作者によるそこからの意図的な逸脱も多く、³⁹ この戯曲を読み解くうえで史料的価値はけっして高いとはいえないものだが、以下に引用するその冒頭の導入部からは、当時この歴史素材に求められていたであろう意義の一端が垣間見えてくる。

西洋の王座が回復されたのち、その最初の皇帝一族の没落につづいて始まった無秩序と騒乱の嵐のような時代にあっては、一人の勇敢なる冒険者が、輝かしいおこないによって歴史に永久に名を残す機会にこと欠こうはずもなかった。[…]

[...] ただ下イタリアにおけるノルマン人の国家のみが、七世紀にわたる幾たびの革命にもかかわらず、現在のヨーロッパとのあいだになおもつながりを保っており、ロベール・ギスカルの王笏のもとに統一されたロンゴバルド人、サラセン人、ギリシア人たちの属州は、いまなおナポリ王国をかたちづくっているのである。⁴⁰

まだ「勇敢なる冒険者」が歴史に名を刻む余地が大いに残されていた中世の時代、「現在のヨーロッパ」にまで命脈を保つ伝統的な「王国」のいしずえを築いたロベール・ギスカルは、ありし日の英雄的君主像の一つの典型であったといえるだろう。まさに君主制の一つの理想を描くに格好の素材であったはずのこの王の存在が、しかし、クライストの作劇にとって、おそらくその最大の躰きの石となった。それはあの「民衆」との関係において、作中のギスカルが置か

³⁸ Vgl. Kleist (2011), S. 63ff. („Zugänge“)

³⁹ Vgl. Stephens (2009), S. 63f.

⁴⁰ Funck, Karl Wilhelm Ferdinand v.: Robert Guiscard. Herzog von Apulien und Calabrien [1797]. In: Kleist, H. v.: *Sämtliche Werke*. Brandenburger Ausgabe. Bd. I/2: Robert Guiskard. Hrsg. v. Roland Reuß in Zusammenarbeit mit Peter Staenge. Basel/ Frankfurt am Main 2000, S. 39-98, hier S. 39f.

れている矛盾した位置づけのなかに端的に表れている。

4. 1. 革命のコノテーション？——民衆あるいはペスト

悲劇の断章は、ある陳情のために王のもとへと向かう群衆の登場で幕をあける。ト書きによれば、「壮麗な武具に身を固めた」ノルマン兵たちの一団に「老若男女を含む民衆 (Volk, jeden Alters und Geschlechts)」がつきしたがうというかたちで編成されたこの行進は、それにつづく民衆のコロスともあいまって、鮮烈な印象をかき立てる導入部となっている。正装の軍人たちとはあきらかに区別される「民衆」という名のこの一群は、劇の冒頭からギスカールへの辛辣な批判を歌い上げるのだ。

民衆 (騒然として) :

熱い祝福の祈りとともに、威厳ある長たちよ、／ギスカールの幕舎までおまえさまが
たについていこう！／もしあの大岩を揺るがさんとしてすすむのであれば、／神の右
腕なる正義のケルビムがおまえさまがたを導いてくれるはずだ、／不安に沸き立つこ
の大波の全軍 (die ganze Heereswog) をもってしても／あの岩のまわりでは泡と砕
けるしかないのだから！ いかずちの矢を／あの大岩に打ちおろせ、われらに道を／
ひらいてくれ、この恐怖に満ちた野營地の／惨状のなかから連れ出してくれ！ (1-9)

「恐怖に満ちた野營地の惨状」とは、猖獗をきわめるペストのことを指している。ペストの猛威にさらされた民衆は、東ローマ帝国遠征を諦め即時撤退を望んでいるが、コンスタンティノーブルの攻略に固執するギスカールはかまわず進軍をつづけようとする。ギスカールを不動の「大岩」に、みずからを「泡と砕ける」「大波」にたとえ、その無力を嘆く民衆は、「いかずち」の鉄槌を望むほどにこの王へのいらだちを募らせている。そしてついに、民衆がギスカールを「破壊者」と呼び、彼の墓石に「われらの子らの祝福」ではなく「その呪い」がふりかかることを願う、激しい呪詛の言葉を放ったところで、この猛々しい合唱は幕となる (31-36)。

詩行にしてわずか 36 行の民衆の声によってもたらされる、冒頭からのこの強烈な余韻は、しかし、必ずしもその後の筋の展開に調和するものではない。ここで暗示されている民衆とギスカールのあいだの対立は、コロスの語調が喚起する予感とは裏腹に、暴力的なものには発展しないのだ。これにつづく第 2 場で、「この場の收拾をつける」ために (39)、一人のノルマン兵によって民衆のなかからアルミンという名の老人が選出され、以後、この老人が民衆の「代表として声を届ける (die Stimme führen)」(48) ようになることで、民衆のもつ潜在的な暴力性は中和され抑制されていく。老人と民衆のあいだで交わされる次のようなやりとりは、このことを表す顕

著な一例であろう。ギスカールが聞く耳をもたないときには、「この民衆みな苦しみを拡声器のように」響かせ、王に「自分の義務が何たるか」を思い知らせてやってほしい (49-54)、そう民衆の一人から求められたアルミンは、彼に向かってこう答えるのだ。「もう一度言うておくが、わしは嘆願のためには声を貸しても、／暴動 (Empörung) のために貸すつもりなどないのぞな」 (60f)。——そしてのちにギスカールの息子の口から、この老人が「かつて、ギスカールが揺りかごにいた頃にその世話をした」こともある、ギスカール家の「家族ぐるみの友人 (Hausfreund)」 (179f.) であったことが語られると、作中での彼の役割はいよいよあきらかとなってくる。すなわちこの老人は、被支配者側と支配者側の双方に帰属するいわば特権的な調停者として、戦争とペストという例外状態のさなかにあつて、あらゆる対立の緩和と隠蔽をはかる役目を任されているのである。

さきの発言や「家族ぐるみの友人」というその立場からもわかるとおり、この老人による調停が民衆とギスカールのどちらの側に資するものであるのかは、一義的には判断しがたい。しかしたとえば、第3場において、幕舎から出てこないギスカールに代わり交渉の舞台に立った彼の娘ヘレナが、民衆を追い返そうとしながらも、最終的に民衆側の要求 (ギスカールが出てくるまで幕舎のまえにとどまること) を容認させられてしまうとき、この戯曲のなかで民衆と支配者層のどちらが優位に立っているのかはあきらかだろう。たしかに、すでに実質的には転倒しているこうした主従の力関係は、そこに「暴動」を嫌うアルミンという緩衝材が差し挟まれることによって、「革命」⁴¹ という暴力的な力関係で社会秩序の転覆にいたる可能性をはじめから根こぎにされてしまっているし、また、理知的な「代表者」を経由してみずからの意思を政治的決定に反映させる、こうした民衆のあり方は、自分たちを代表しているアルミンの見解に彼らが反対するすべをもたないという点で、また政治的な主体としての確立をみてはいない。しかし、それでもやはり、それは「民衆」という存在に認められた政治的比重のたしかな高まりを告げるものだ。歴史的な構築物としてこのテキストをとらえるとき、これがその重要な一側面であることは間違いない。⁴²

⁴¹ 革命という主題、とりわけフランス革命との関連でクライストを論じた研究は少なく、それは主として、この1789年の政変に対するクライストの評価をはっきりと裏づける有力な証拠がないという事情に起因している。この主題を論じたものとしては、たとえば以下を参照。Vgl. Hiebel, Hans H.: *Reflexe der Französischen Revolution in Heinrich von Kleists Erzählungen*. In: *Wirrendes Wort* 39 (1989), S. 163-180; Grathoff, Dirk: *Heinrich von Kleist und Napoleon Bonaparte, der Furor Teutonicus und die ferne Revolution*. In: Neumann, Gerhard (Hrsg.): *Heinrich von Kleist. Kriegsfall – Rechtsfall – Sündenfall*. Freiburg im Breisgau 1994, S. 31-59. クライストのテキストから、革命の「動因」に対する肯定的評価とその「結果」に対する批判的態度を抽出したグラートホフの見立ては、一定の説得力をもったものとなっている。

⁴² 註10・11参照。

しかしそれでは、この悲劇の断片のなかに、「革命」の含意は本当に存在していないのだろうか。いいかえれば、前章で確認した『オーストリア救国について』では、きわめて慎重にその暴力的な契機の除去が試みられていたはずのあの民衆、為政者にとっての潜在的脅威としてのあの民衆の存在は、『ギスカール』にその影を投げかけることはなく、政治的主体としての彼らの昇格は——アルミンという穏健な媒介者を経由することで——ただただ歓迎すべきものとしてのみ、テキストにおいて予感されているのだろうか。

民衆の暴力がアルミンによって厳しく制御されている一方で、戯曲に書き込まれたもう一つの破壊の力、抑えがたく荒れ狂うペストの存在が、このことを考えるための手がかりとなる。フランス革命後のドイツ語圏社会において、「自然災害」が革命を暗示的に語る比喩として用いられていたというのは比較的広く認められた話だが、⁴³ ここでそれと類似した機能を「ペスト」という文化的記号に求めることも不可能ではないだろう。⁴⁴ ボッカッチョの『デカメロン』（ペストから逃れてきた人々が語った小話のアンソロジー、という体裁で書かれた杵物語）の形式を借用し、杵物語のきっかけとなる出来事を「ペスト」から「革命」へと移しかえたゲーテの『ドイツ避難民間談集 (Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten)』（1795）は、その好例である。⁴⁵ ペストをめぐるこうした同時代のコノテーションは、クライストが作品の下地としたこの疫病を政治的・社会的なレベルで読み解いていくための、あらたな視座をひらいてくれる。

『ギスカール』において、擬人化によってその猛威を強調して描き出されているこのペストは、「ギスカールの民衆全員の死骸」を積み上げんばかりの勢いで、ノルマン人たちを蹂躪していく（10-21）。わけへだてなくすべての人に等しく襲いかかるこの災禍にとって、君主ギスカールも

⁴³ Vgl. Link, Jürgen: Die Revolution im System der Kollektivsymbolik. Elemente einer Grammatik interdiskursiver Ereignisse. In: Eibl, Karl (Hrsg.): *Französische Revolution und deutsche Literatur*. Hamburg 1986, S. 5-23. ここでは言説分析の立場から、フランス革命をめぐる当時のさまざまな比喩やイメージに光があてられ、それらが一つの集合的な象徴体系を形成し「熱狂」を生み出す装置として機能する側面のあったことが指摘されている。ちなみに、この節のはじめに引用した一節を含め、『ギスカール』のテキストのなかで何度か「海」にたとえられる民衆は（5f. 39, 105）、それをかりにこうした象徴体系のリスト（そこには「洪水」も含まれる）に照らして解釈するならば、それ自体としてやはり一つの潜在的な革命的群衆である。みずから「海」であるまさにその民衆が、実際の「海」に取り巻かれていることによって逃げ場をなくし、窮地に立たされるという構図も（335）、「ペスト」が「民衆」を襲う構図によく対応している。

⁴⁴ 加藤丈雄「ペストと革命——『拾い子』の社会史的考察」：京都府立大学『人文』第45号（1993年）、37~65頁所収、40~44頁参照。加藤は、同時代の言説状況とクライストの作品相互の参照関係にもとづいて、「ペスト」を革命のアナロジーとして読むことの妥当性の傍証を試みている。なお、本論における『ドイツ避難民間談集』への言及は、この論文の示唆に負うものである。

⁴⁵ この作品の外枠をなす物語部分には、革命に対するゲーテ自身の明確に拒否的な姿勢が典型的に表れている。Vgl. Borchmeyer, Dieter: *Höfische Gesellschaft und französische Revolution bei Goethe. Adliges und bürgerliches Wertesystem im Urteil der Weimarer Klassik*. Kronberg im Taunus 1977, S. 223-229.

その例外ではない。⁴⁶ ここでは「死」というきわめて否定的なかたちをとった平等が、民衆と君主のあいだに現出する。⁴⁷ さらに、ここできりに「王の二つの身体」に関する旧体制下の国家理論⁴⁸の文脈を考慮するならば、みずからに向けられたペスト感染の疑惑に対し、その身体の健全ぶりを強調してみせるギスカールの言葉（439-442, 461-465）を象徴的なレベルで理解することもできるだろう。私的な個人としてのみずからの身体について、たとえば彼が「四肢の一本一本も自由に動かせる (seiner Glieder jegliches beherrscht)」(440) と言うとき、それを同時に彼の象徴的身体、すなわち国家に関する比喩的言明としても受けとるとすれば、この君主のペストへの感染は、彼が四肢を自由に動かす力とともに、民衆を自在に支配する力をも失ったことを意味していることになるのである（正当にも、アルミンは民衆のことをギスカールの「腰髄 (Lenden Mark)」(551) と表現した）。

当時「ペスト」という比喩形象に託されていた指示機能、そして『ギスカール』においてペストが果たしている役割——民衆と君主のあいだに平等をつくり出し、さらに君主を死に追いやる——から、この戯曲に込められた「革命」のコンテクションを読みとることが妥当だとすれば、さきほど確認したような作中における民衆の位置づけは、あらたな光のもとで再検証に付されねばならない。「ペスト」という文化的記号に暗示されたこの民衆の象徴的な暴力は、アルミンの統制下にある彼らの現実の暴力とは異なって、容赦なく君主の命を狙い、それどころか、当の民衆自身にも尋常ならざる荒廃をもたらす。⁴⁹ 重要なのは、それがかりにある種の革命、すなわち君主の死を招来するものであったとしても、その帰結それ自体は民衆によって望まれているものではけっしてない、ということだ。この「地獄から遣わされた」(11) 使者は、テキストのなかでは一貫して否定的に表象されており（それに冒された者は「すさまじい精神錯乱に」陥り、「神と人間、そしてすべての親しい人たちに対して「牙をむく」(511-515)）、さらに、ギスカールの感染の疑いを知って取り乱した民衆は（「おれたちはおしまいだ (Verloren ist das Volk) !」 「ギスカールなしでは助からない！」(332f.)）、最終場ですべてにギスカールその人がすがたをみせると、「歓喜の雄叫びを上げて」彼の登場を歓迎するのである (407)。

『ギスカール』は、いわば革命劇と反革命劇⁵⁰の中間に位置する断章である。ここでは民衆の

⁴⁶ たしかに、テキストのなかにはギスカールのペスト感染をはっきりと裏づける記述はない。しかし、その構想から判断して（ヴィーラントの言にしたがえば、そのももとのタイトルは『ノルマン人ギスカールの死』であった）、またテキスト末尾でみられる彼のあきらかな身体異常の徴候 (vor 487, vor 489) から推測して、彼がペストに感染していたことはほぼ確実といっていよう。「伝染病」によって死を迎えるというギスカールの末期のエピソードは、フンクの評伝にもみられるものである。Vgl. Funck, S. 97f.

⁴⁷ Vgl. Schmidt, S. 133f.

⁴⁸ J-M・アポストリデス『機械としての王』（水林章 訳）みすず書房 1996年、3頁以下参照。

⁴⁹ 註43参照。

⁵⁰ フランス革命以降、君主制を賛美・擁護するこうしたジャンルの戯曲が数多く書かれた。Vgl. Jäger,

政治的地位の上昇と革命に対する明確に拒否的な態度とが織りあわせられ、そして同時にその背後では、まさしくここで嫌悪の対象とされているはずの革命が象徴的な次元で進行している。それは、クライストが抱えていたジレンマの重大な一局面の刻印である。時代からの要請がもつリアリティとみずからが志向する社会のあり方が根本的な矛盾にさらされたとき、この時点での彼はまだそれを解決するすべを見出すことができなかった。その解決策の不在は、形式のうえでは、断片という挫折のかたちをとって、内容のうえでは、かつて存在した君主が被る批判と延命措置という矛盾した手続きを介して、テキストのなかに書き込まれることとなったのである。

4. 2. 君主制の不安——統治の正統性と枢密の政治をめぐる

民衆の台頭への期待と危惧、いかえれば、革命／反革命を志向する混線した政治的欲望を取り込んで成立しているこのテキストを、今度は「民衆」ではなく「君主」の側から眺めることで、その欲望のもつれと展開が何を意味するのかをみておくことにしたい。

この断章の主人公ロベール・ギスカルは、最終の第10場にいるまで、舞台上に彼本人がすがたをみせることはない。それ以前に民衆(具体的にはアルミン老人)との対話者となるのは、彼の親族たちである。最初に民衆との交渉にあたることになるヘレナについてはすでにふれたが、彼女についてギスカルの幕舎から現れるのは、ノルマン人の二人の公子、ギスカルの同名の息子ロベールと、甥のアベラールだ。断片中最長のこの第6場は、さきのヘレナとの交渉場面とは大きく趣を異にしており、そこで描かれるのは、この二人の公子のあいだで交わされる「正統な統治者」をめぐる議論、より具体的には、二人のうちどちらがギスカルの後継となるべきかをめぐって闘わされる論争である。まず、この論争の流れを簡単に追いかけておこう。

ロベールとアベラールにはちょうど対極的な性格づけがなされており、アルミンいわく、前者は民衆に対して「命令する (Gebietend)」言葉を、後者は「許可する (erlaubend)」言葉をあたえる (309f.)。端的にいってしまえば、それは高圧的で権威主義的なロベールと、民衆に友好的で懐柔的なアベラールの対立であり、そのどちらが次代の君主としてふさわしいかという問いをめぐる二者択一である。一見してこの争いは、少なくとも人心をつかむという点において、民

Hans-Wolff: Gegen die Revolution. Beobachtungen zur konservativen Dramatik in Deutschland um 1790. In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft* 22 (1978), S. 362-403. ただし一般に、反革命派が必ずしも旧体制の君主制を無批判に支持していたというわけではない。実際、「反革命」という言葉でくられる政治的・思想的潮流には、絶対主義の制限による君主制の改革を志向した「伝統主義」(バーク)から、社会を神によって創造された超越的な秩序とみなす「神政政治」(メーヌル)にいたるまで、さまざまな立場があった。マッシモ・ボッファ「反革命」: フランソワ・フェレ/モナ・オズーフ 編『フランス革命事典2』(河野健二/阪上孝/富永茂樹 監訳) みすず書房 1995年、1099-1109頁所収参照。

衆への「愛 (Liebe)」を強調するアベラールに軍配が上がったかのようにみえる。⁵¹ ロベールは、自分に対して守られるべき当然の礼節を「話していたらあやうく忘れかけていた」というアルミンのことを (198f.)、「小僧の生意気さでも／貴様のまったく野放図な気性よりは／ました」と言って罵倒するが (210-212)、たしかにこの老人の口から聞こえてくるのは、現君主のこの狭量な息子に対する皮肉まじりの辛辣な批判なのだ (193-197)。

しかし、君主の正統性をめぐって、次第に議論は当初予想されたよりも複雑な様相を呈していく。ロベールはみずからを「統治者の息子、神の恩寵にあずかった者」と称し、対するアベラールのことを「偶然によって生まれた公子」と呼ぶことで、統治者としてのみずからの正統性を主張しようとするが (272f.)、それに対してアベラールがおこなう抗弁は、事情がそれほど単純なものではないことを裏づけている (277-283)。⁵² そしてきわめて印象的なことに、この容易には決着しがたく思われる案件に関して、ロベールその人によって、そしてアベラールの同意を得て (284-287)、その裁定者に指名されるのは、ほかでもない、あの民衆なのだ。

ギスカールの息子たちよ、わが言葉によって駈逐されんとし、／この者 [アベラール] の甘い戯れ言がここに引き留めようとしている、当の者たちよ、／ほかならぬそなたらを私は審判者として (zu Richtern) 召喚しよう！／私かこの者か、おまえたちが決めるがよい、／そして二人のうちどちらかの命令を踏みこむのだ。(266-270) [引用者註]

この要請を受けて、民衆の代表者である老人が下した審判は、しかし、調和的な解決とはいえない、たい両義的なものだった。老人はアベラールを絶賛する。「民衆にとっての神のような存在 (Des

⁵¹ ロベールが民衆の「あつかましき」として非難するものを、アベラールはノルマン人にふさわしい「自由」のあかしであるとしてそれを擁護し (234ff.)、さらに、王位継承の「権利 (Recht)」ではなく民衆への「愛」こそがノルマンの王冠を手にするための条件なのだと主張する (245f.)。

⁵² ギスカールの先代の王はアベラールの父オットーであり、もともとギスカールはこの甥の後見人にすぎなかったのだから、実質的にその後見人の息子にすぎないロベールよりも、むしろ先代の息子である自分のほうに正統な継承権が認められるべきである、というのが、ここでのアベラールの主張のあらましである。——1808年、『フェーブス』誌上にこの断片が発表されたときには、この箇所が作者による註釈が付けられており、ギスカールの王位継承をめぐる事情が簡潔に説明されている。それによれば、ノルマン国家の創始者ヴィルヘルムにはほかにも三人の兄弟がおり、みな子どもがなかったために、その兄弟が眞正に統治の任にあたることとなった。三男オットーの息子アベラールは、父の死後王位を継承することになっていたが、オットーによって彼の後見人に指名されていた四男のギスカールが、「兄弟の順位が彼に有利に働いたのか、民衆が彼を非常に好んだからなのか」、理由はわからないものの、そのまま「王位に就いた」とされる。Vgl. SWBI, S. 153. なお、クライストはギスカールの家族構成を史実より大幅に簡略化している。Vgl. Stephens (2009), S. 63f.

Volkes Abgott)」であった往年のギスカールの面影を彼に認め、「もしご子息があなたさまのような者となることがあれば」「叔父上もきっと／さぞかしお歓びになることでしょう」と、(あいかわらずロベールへの批判を織りまぜながら)このギスカールの甥をほめたたえる(289-296)。にもかかわらず、自分たちがしがたうべき君主として老人が選ぶのは、アベラールではなくロベールなのだ(309-311)。理由はあきらかである。老人はロベールに向かって「冷たく」言い放つ。「おまえさまが立ち去れとお命じになるのなら、わしらは反抗などいたしますまい。／おまえさまはギスカールの息子、それだけで十分でございます！」(312f)

アベラールが主張するような相続法上の正統性が本当に彼になかったのかどうかは議論の余地があろうが、少なくともここで老人は、まさしく継承権という観点から、ロベールを正統な後継と認めた。⁵³ しかしすでにあきらかなように、「民衆により近い(näher noch verwandt)」関係にあるのはむしろアベラルのほうであり(280)、さらにアルミンの批判やアベラルの所見(380-386)が正しいとすれば、ロベールは政治的にも無能である。ロベールとアベラルのあいだのこの対立は、継承順位のうえでの正統性と民衆の支持に値する人格という、ギスカールの代までは一人の君主のなかに調和的に保たれていた二つの資質を、もはや一人の人間だけに期待することが不可能になる、そうした時代の到来に対する悲観的な展望を示唆しているといえるだろう。ただしこのとき、問題解決のための最終的な決定権が民衆にあたえられているという事実、さらにいえば、決着のつかぬ問題の裁定のために民衆の判断をあおぐ、というその提案が、民衆に近いアベラルではなく、ほかならぬロベールによってなされるというこの事実のなかに、きわめて重要な示唆が含まれていることを見過してはならない。ここで民衆は、政治にたずさわるすべての者が——民衆に友好的であろうが敵対的であろうが——つねに参照すべき最終的な審級として、その決定的な地位を保証されているのである。

旧来の君主制の機能不全を示すこうした徴候は、すでにギスカール本人においても確認することができるものだ。継承権争いに一応の決着がついたのち、アルミンから、いつならギスカールへの拝謁がかなうのかと問われ、「狼狽」して(vor 316)あれこれと言いよどむロベールを尻目に、アベラルは彼が必死に「隠している」「真実」(324)を語ってしまう——民衆は、ギスカールがペストに感染しているかもしれないと知らされる(325ff.)。その後、ロベールは、「この裏切り者め！」と言ってアベラルを罵倒し、幕舎のなかにすがたを消すが(329f.)、ロベール

⁵³ デネラーは、ギスカールによる王位の不当な篡奪(註 52 参照)を論拠に、彼においてすでに継承権の正統性は認められないとする解釈の可能性を示している。彼女の解釈では、ギスカールの統治の正統性は民衆による彼の「カリスマ化」によって担保されているものにすぎないとされる。Vgl. Denner, S. 79f., 83f. カリスマ的統治者としてのギスカールにとってアルミン／民衆の主観的なパースペクティブがもっている重要性については、以下のリードルによる指摘も参照。Vgl. Riedl, S. 37.

ルのこうした反応からは、彼が隠蔽に努めたこの秘密が幕舎のなかの人々にとっていかに重大なものであったかが窺われよう。それは、二重の意味において秘匿されねばならないものであった。——第一に、その内容において。すでに前節でみたように、君主が民衆と同じペストにかかって命を落とすということは、彼の統治の神聖さ⁵⁴を著しく傷つけ、民心の離反という結果を招きかねない事実であった。ギスカール（の統治）を神的な領域に結びつけるレトリックはテキストのなかにくり返し現れるが、⁵⁵この「唯一無二であり／永遠なるかけがえのない存在」（471f.）を、たんに即物的な意味においてだけでなく、宗教的意味においても喪失してしまうことへの不安は、幕舎の内外を問わず、この断章全体を貫く一つの通奏低音となっている。

そして第二に、クライストがこの断片を書いた時期において、為政者たちの秘密が外部の者に知られてしまう、という事態それ自体が何を意味するものであったかということに、注意を向けたい。このテキストが書かれたのは一つの転換期、すなわち、秘密を重視し、君主の意志にもとづく絶対的支配を正当化する「枢密」の政治から、広範な人々に多様な知識・情報へアクセスする権利を認め、公共的な議論を喚起することで、理性にもとづく法の合理性を統治の基準とすることをめざした「公開性」の原理へと、公／私をめぐる大きな価値転換が起こっていた時代であった。⁵⁶このとき、かつて秘密をもつことが公然と認められ、それを威信の源泉とさえしていた宮廷政治は激しい批判に直面し、政府は以前のように機密を保持することができなくなる。しかし、それはあらたな枢密戦略の始まりであったにすぎない。いまや政府は、秘密をもっているという事実自体を秘匿することで、外部からの批判を回避し、権力の維持をはかることに腐心するようになるのである。⁵⁷『ギスカール』にはむしろ——クライストの場合たいていそうであるように、作品の時代設定とは裏腹に——すでにこの価値観の転倒、枢密戦略の転換が起こったあとの状況が描かれているといえるだろうが、いずれにしても、保持していたはずの秘密が公開

⁵⁴ 一般に、王と宗教は切り離しがたく結びついたものだった。ジャン＝ポール・ルー『王——神話と象徴』（浜崎設夫 訳）法政大学出版局 2009年、4頁以下参照。

⁵⁵ たとえばアルミンは、ギスカールを「不死の人（unsterblich）」とたたえ（452f.）、民衆を「この嘆きの谷（Jammertal）」から連れ出す救助者の任を、彼に求めている（519-524）。ただしこうしたレトリックは、ギスカールのペスト感染がいつそうたしかなものとなるにつれて、逆説的なかたちでその空虚さを際立たせているようにも思われる。

⁵⁶ Vgl. Habermas, Jürgen: *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. Mit einem Vorwort zur Neuauflage. Frankfurt am Main 1990, S. 116-120. (ユルゲン・ハーバーマス『第2版』公共性の構造転換 — 市民社会の「カテゴリー」についての探究』（細谷貞雄／山田正行 訳）未来社 1994年、72-76頁。)

⁵⁷ Vgl. Twellmann, Marcus: Was das Volk nicht weiß... Politische Agnotologie nach Kleist. In: *Kleist-Jahrbuch* (2010), S. 181-201, bes. S. 186ff. ここではおもに、1809年4月以前に書かれたとみられるクライストの評論『フランス・ジャーナリズムの手引き（Lehrbuch der französischen Journalistik）』が分析の対象となっている。クライストを公共性のテーマから論じた稀少な論考である。

されてしまう、という事態は、統治者にとってはそれ自体として大きな損失をもたらすものであり、同時に、『ギスカール』についていえば、それは民衆の側の勝利、すなわち、知と政治における公開性の原理の勝利を記録する、一つの徴候でもあったのだ。⁵⁸ たとえこの公開性が、ハーバースが提示したような市民的公共圏の担い手たちの場合とは異なり、民衆の自発的な要求にもとづくものではなかったとしても。

しかしここでも忘れてならないのは、こういった君主制の諸々の綻びが、けっしてその体制を批判する目的で描き出されているものではない、という点である。前節ですでに確認したように、この戯曲のなかの民衆にはまだ政治的決定に関わる主体としての自覚は認められていなかった。それは為政者の側、あるいは作者クライスト自身の認識でもあっただろう。さきの第6場の展開が、このことを端的に物語っている。——そこで民衆／アルミンは、ロベールの期待どおり、伝統的な継承権の考えに則って判断を下したのだ。継承権をもつ者が必ずしも有能とはかぎらない、ということは十分理解しているにもかかわらず、老人は王家の家系存続を優先し、⁵⁹ 自分たちにとって実り多いほうの選択肢を選びとることはできず、結果として、民衆はあいもかわらず君主制の枠内にとどまってしまうこととなる。旧態依然とした君主制の窒息が、もはや隠しようもない事実であることはたしかだとしても、それになかば必然的にもなうはずの民衆の社会的地位の上昇、あるいはその極致としての「革命」の瞬間は、作中の支配層の人間によっても、また民衆自身によっても、積極的に待ち望まれているものではないのである。それは、容赦なく押し寄せる革命の余波を可能なかぎり遅延させながら、君主制の再点検をおこなう試みであるようにすらみえてくる。最後に、君主の可能性にすべてが賭けられたこのテキストにおいて、そこからの離反を志向しながらもなしえなかった一人の人物に目を向けることで、この論を締めくくりにしよう。

5. おわりに——不在の君主と遅延された革命

口外してはならない秘密を漏らしたアベラールは、ロベールの罵倒、アルミンからの失望にくわえ (391)、ついにすがたをみせたギスカールからは制裁を予告される (412f.)。一つの身体と

⁵⁸ ただし、民衆のあいだに広まった「迷妄」や「流言」によって統治者が脅かされる、という状況の記述自体は、フンクの評伝にもみられるものである。Vgl. Kleist (2011), S. 64. („Zugänge“)

⁵⁹ 貴族の生まれであるクライストにとって、世襲による家系存続の保証は（彼自身の家族に対する関係における）良好ではなかったにもかかわらず、重大な関心事であった。背景には、「市民的小家族」というあたらしい家族モデルの登場がある。Vgl. Stephens, Anthony: Kleists Familienmodelle [1989]. In: Ders.: *Kleist – Sprache und Gewalt*. Mit einem Geleitwort von Walter Müller-Seidel. Freiburg im Breisgau 1999, S. 85-102. この問題圏で『ギスカール』に論及したものとしては、Schneider, Helmut J.: Der Sohn als Erzeuger. Zum Zusammenhang politischer Genealogie und ästhetischer Kreativität bei Heinrich von Kleist. In: *Kleist-Jahrbuch* (2003), S. 46-62, bes. S. 46-49.

して眼前に存在する君主のもつこのリアリティが、一見アベラールの言葉の真実味を否定するものであったとしても、やはりこの断片の最後のくだりは、彼の語った秘密がたんなる虚偽ではなく、一つの「真実」であったことを裏づけるものであるだろう。⁶⁰ だとすれば、テキストのなかでクライストがこの公子にあたえた位置づけは、彼にとって正当なものだったといえるだろうか。

ギスカールの死を正確に予期し、その息子の無能を見抜いたうえで、民衆への「愛」に統治の正統性の源泉を求める彼の言葉は、旧体制の崩壊を告げる明瞭な宣言文であったように思われる。むしろ、「嘆願する者が何を欲しているのか、それを聞くことは／たやすい、聞き入れるというのでなければ」(255f.)と語るアベラールが、ロベールの言うようなたんなる「ごますりの偽善者 (Heuchlerherz)」(389)であった可能性は否めない。しかし、このテキストのなかで彼に配された身ぶりや性格が、彼を明確に一つの価値観の体現者へと仕立て上げるものとなっている点を見逃してはならないだろう。——冒頭のト書きの舞台説明によれば、ギスカールの幕舎は丘のうえに配置されていた。第6場でおこなわれた論争ののち、ロベールが幕舎に入ってしまうと、アベラールは民衆と話をするために「丘から下に降りてくる」(vor 338)。その後、彼がふたたび幕舎のほうに上がっていくのは最終場、ギスカールから呼び戻される時のことだ。「この公子は、民衆のなかに紛れていたが、丘をのぼり、ギスカールの後ろに立つ」(vor 413)。君主の命により本来いるべき場所に帰還するまで、アベラールの居場所はこの「民衆のなか」にあったのだ。それより以前、彼はアルミンから「民衆の友 (ein Freund des Volks)」(294)と呼ばれていたが、1813年、『ギスカール』の発表より五年後に出版されたカンペの辞典(外来語に関する補巻)の「民主主義者」の項目には、その定義として「民衆の友 (ein Volksfreund)」という言葉が載っていたことを、ここで指摘しておきたい。⁶¹

作品世界のなかでアベラールは、未来についてのきわめて現実的な予告をおこなったはずであった。君主ギスカールの延命にすべてが賭けられたその世界において、この予言者に「裏切り者」あるいは「破滅の使者 (Bote des Verderbens)」(336)という烙印が押されることとなったのは、なかまづその当然の帰結であったといえる。この作品がとることになった断片という形式は、高まる民主主義⁶²の気運と民衆への不信——作中でクライストが描いた民衆には、まだ政治的主体としての自覚が認められていなかった——という矛盾を、理想的君主という担保によって解決しようとする試みの、「挫折」の表れとして読み解くことのできるものだ。それは、君主の死と革命

⁶⁰ 註46参照。

⁶¹ Vgl. Campe (1970), Art. „Democrat“, S. 253. 「民衆の友 (l'ami du peuple)」はフランス革命の「殉教者」ジャン＝ポール・マラーの愛称でもあった。Vgl. Hunt, Lynn: *The Family Romance of the French Revolution*. Berkeley/Los Angeles 1992, S. 75ff. (リン・ハント『フランス革命と家族ロマンス』(西川長夫/平野千果子/天野知恵子 訳) 平凡社 1999年、137頁以下。)

⁶² 「民主主義」の概念については、註29を参照。

の完成を永久に先送りする形式である。のちに、『オーストリア救国について』では一応の達成をみることになるその解決をここで阻み、作品にそのような形式をあたえたもの、それは、描きえない君主の存在であった。最終場にいたるまで、舞台のうえに現れることすらできないこの王は、その身体性を頼りにかろうじて生き延びてはいるものの、彼に穿たれた民主主義の傷痕によって、すでにもう実質的に、その統治の正統性は無効化されてしまっている。にもかかわらず、民衆にはこの空席となったはずの王座に座る意思はなく、その意味で、その空席には〈不在の君主〉という一人の幽霊のような存在が延々と居座りつづけているのである。かつての理想的な君主の存在にすがたを借りたギスカールのこの延命は、そのまま革命の遅延を意味していた。

これは、民主主義をめぐる徹頭徹尾君主の側から書かれた奇妙な戯曲である。本論の冒頭で引いたクライストの手紙に記されている「まだ存在していない誰か」とは、深読みするなら、この時点ではまだ想像すらかなわぬ君主の存在に向けた、未来志向の言葉であったのかもしれない。ただし、のちの歴史はこの断片に一つのもっとも苛酷な回答をあたえた。⁶³ この事実は、テキストにおいて猶予されているその回答をどこかきさがし求めようとする思考を、否が応にもためらわせる。ここではむしろ、それが永久に猶予されているということそれ自体の意味に、あらためて目を向けておく必要があるだろう。それは、歴史家の記述する政治史によって長らく等閑に付されてきた「19世紀初頭の多様な可能性」、⁶⁴ そのいずれの可能性に対しても明確な応答を保留しようとした一つの試みの記録にはかならない。しかし、断片という形式において確保されたこの猶予期間が、その現実の作者にも適用されることはけっしてなかった。「多様な可能性」が入り乱れる当時の流動的な状況下において、⁶⁵ そのような留保の態度を維持することは不可能に近く、『ギスカール』はいわばそうした試みの最後の残照だったのかもしれない。クライストが政治的な執筆活動に傾倒していったのは、⁶⁶ まさにこの戯曲の完成の放棄——あるいはむしろ、この戯曲の構想にそれ以上こだわることの意味が希薄になってしまったというほうが正しいのかもしれないが——の直後のことであったのだから。

⁶³ クルト・ゲルラッハ＝バルナウは著書『演劇と国民 (Drama und Nation)』(1934)において、『ギスカール』のなかに「総統と民衆との結びつき」の予型をみた。Vgl. Sembdner, Helmut (Hrsg.): *Heinrich von Kleists Nachruhm. Eine Wirkungsgeschichte in Dokumenten*. München 1997, S. 428f.

⁶⁴ Press, S. 55.

⁶⁵ すでに1806年頃から、クライストの手紙には、不安定な時代情勢に対する悲嘆や皮肉の言葉が折にふれて現れるようになる。Vgl. z. B. SWB II, S. 856f., 870, 884f.

⁶⁶ クライストは『ギスカール』について取り組むことになる『ヘルマンの戦い』を皮切りに、とりわけ1809年という一時期において、政治的傾向の強いテキストを集中的に書き残している。Vgl. Essen, Gesa von: *Kleist anno 1809: Der politische Schriftsteller*. In: Haller-Neumann, Marie / Rehwinkel, Dieter (Hrsg.): *Kleist – ein moderner Aufklärer?* Göttingen 2005, S. 101-132.

Robert Guiskard, der inexistente Herrscher

— Die Volksauffassung Kleists oder eine verschobene Revolution —

NISHIO Takahiro

Das Fragment des Trauerspiels *Robert Guiskard, Herzog der Normänner* dürfte das größte Scheitern von Heinrich von Kleist als Dichter markieren: 1803 beklagte er in einem Brief an seine Halbschwester Ulrike seine Unfähigkeit, das unternommene Werk zu vollenden, und kurz danach verbrannte er sogar dessen ersten Entwurf. Später, 1807/08, nahm er das dramatische Projekt erneut in Angriff, doch auch diesmal gelang es ihm nicht und letztendlich blieb das Stück ein Fragment. Die bisherigen Diskussionen zu diesem fragmentarischen Drama sind, grob gesagt, in zwei Richtungen geführt worden. Einerseits war die Tatsache, dass das Stück unvollendet blieb, selbst ein zentrales Thema, wobei dies hauptsächlich *biographisch* oder *poetologisch* zu erklären versucht wurde. Andererseits haben schon mehrere ForscherInnen, deren Interessenschwerpunkt eher auf dem Inhaltlichen liegt, auf die historische Relevanz des Stückes aufmerksam gemacht, u. zw. auf die Problematik der Legitimität von Herrschaft, die sich im kontrastiven Verhältnis zwischen Regierenden und Regierten manifestiert. Eine Brücke zwischen den beiden Forschungsrichtungen zu schlagen, d. h. dem Scheitern dieses Fragments eine *historische* Perspektive zu geben, ist das Ziel der vorliegenden Arbeit.

Der Ansatzpunkt der Untersuchung ist die allgemeine Auffassung von „Volk“ um 1800. An der Jahrhundertwende hat dieses deutsche Wort einen großen Wertewandel erfahren: Der einst nur für die Unterschicht, also für *einen Teil* der Bevölkerung verwendete Mengenbegriff wurde nun zu einem politischen Oberbegriff aufgewertet, der *alle* Mitglieder der Gesellschaft einschließen sollte. Dieser Wandel, zu dem die Revolution von 1789 einen besonderen Anstoß gegeben hatte, lief aber nicht glatt und linear ab. Noch am Anfang des 19. Jahrhunderts verwendete man üblicherweise – den traditionell dem Worte „Volk“ anhaftenden verächtlichen Klang ablehnend – die

Wörter „Nation“ oder „Völkerschaft“, um eine durch einen gemeinschaftlichen Stamm wie eine gemeinschaftliche Sprache gekennzeichnete politische Einheit zu bezeichnen.

Auch bei Kleists Volksauffassung kann man eine negative Konnotation feststellen, und für die Interpretation vom *Guiskard* ist besonders seine später entstandene politische Schrift *Über die Rettung von Österreich* (1809) aufschlussreich. Während das Volk auch hier keineswegs für vertrauenswürdig gehalten wird, setzt Kleist doch auf sein politisches Potenzial, das er „ein demokratisches Ansehn“ nennt, seine große Hoffnung. Was ihm dieses widersprüchliche Konzept ermöglicht, ist ein im Text idealisiert beschriebener fiktiver „Regent“, der, indem er den gewalttätigen Aspekt des Volkes streng kontrolliert, sozusagen rhetorisch einen dritten Weg zwischen dem veralteten Feudalismus und der gewaltsamen Revolution zu eröffnen sucht.

Das Gleiche gilt aber nicht für *Guiskard*. Zwar sind aus diesem Fragment viele Anzeichen eines revolutionären Strukturwandels der Gesellschaft abzulesen: eine Metapher der Französischen Revolution, ein Volksvertreter, der mit den Machthabern unterhandelt, ein Adliger, der für die Herrschernatur die Partnerschaft mit dem Volk für wichtiger hält als die rechtliche Legitimität, und schließlich der unvermeidlich scheinende Tod des Herrschers, Robert Guiskard. Hier lässt sich jedoch nicht so sehr die scharfe Kritik am Ancien régime oder eine utopische Alternative dazu erkennen, wie in der Forschung oft behauptet wird, sondern vielmehr ist die Sache umgekehrt: Der Autor beharrt schlechthin auf der überkommenen, doch unverkennbar nicht mehr funktionierenden Monarchie, da im Text keine einzige Figur – und das schließt das Volk ein – den Tod des Guiskard wirklich erhofft. Im Unterschied zu der späteren politischen Schrift gibt es hier noch keinen Ausweg: Das Dilemma zwischen dem alten Gesellschaftssystem und dem Kleist als neuem politischem Subjekt fragwürdig erscheinenden Volk spiegelt sich im Bild eines Herrschers, der in der Tat so gut wie nicht mehr existiert und dennoch auf dem Thron bleibt, da das Volk sich nicht getraut, ihn abzusetzen. In dieser Hinsicht zeigt das Unvollendetbleiben des Stückes das Scheitern von Kleist, der in jener geschichtlichen Übergangszeit noch keine aussichtsreiche Lösung für das neue politische Dilemma finden konnte. Da das Stück ein Fragment geblieben ist, wurde sozusagen der Untergang der Monarchie und die Vollendung der Revolution auf immer verschoben.